

図87 SX4190とSX4191 1:50

3 検出遺構

古代の遺構

SX4190 南口を閉塞口とする横穴式石室(図87)。主軸はN-34-Wと北で西に振れる。3段分の積石が残るが、1段目は平積み、2段目以上は小口積みとなり、北側の奥壁はドーム状に弧を描く積み方で、閉塞石は小口積み。北壁幅0.28m、最大幅0.44m、東側壁長1.62m、西側壁長1.72m、南壁幅0.31m。掘形を掘って石を積み、遺骸をおさめた後、南側に閉塞石を積んで埋めたと見られる。床面には貼り石はなく、10cm程度の置土を敷く。石室の南側は地山の落ちがテラス状になることから、墓道の可能性もある。

SX4191 SX4190の西側に隣接し、その掘形を切って据えられた石組み(図87)。山城の造成時に西半分を削平さ

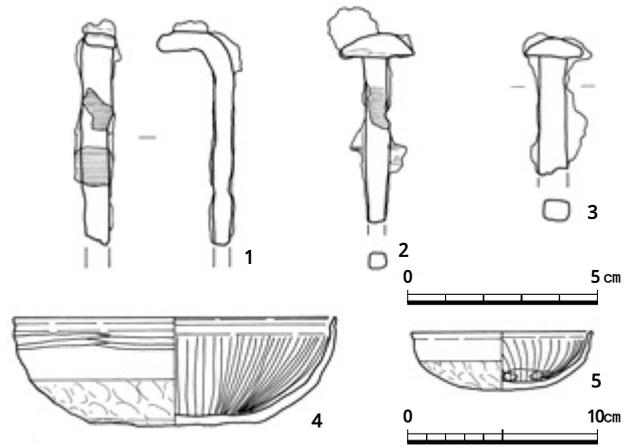


図88 SX4190周辺包含層出土遺物

れた石室の可能性が高いが、後世に攪乱された石室の石を転用して階段状にすえた可能性もある。

SX4192 SX4190の北東に隣接した小型石室。SX4190に比べ石室床面が約50cm高く、切り合い関係は不明であるが、おそらくSX4190よりも新しいと思われる。山城の造成時に大きく削平されたとみられ、基底石と床面の貼石の一部しか残っておらず、北側は完全に壊されている。N-8-Wと北で西にやや振れる。

中世の遺構(図4)

SX4193 雷城の主廓。花崗岩の岩盤である地山を削り出して約25m四方の平坦面をつくる。この上で検出した遺構は、北側と西側の耕作溝2条のみ。

SX4194 雷城の副廓。やはり風化して柔らかくなった花崗岩の岩盤を削り出す。東西約20m、南北約8m。高さはSX4193より30cmほど低い。

SD4195 主廓SX4193と副廓SX4191を分ける空堀(図6)。約4.5m幅で開削するが、急激に狭くなり、断面がV字形を呈する。廓面からの深さ約2.5m。堀底の幅が15cmほどしかない、いわゆる葉研堀。丘の中軸線上に土橋状の地山削り残し部分がある。土橋に登る踏み石は後世に積んだと思われる。埋土から中世から近世の土師器、陶磁器類が出土した。



図89 SX4190・SX4191・SX4192(南から)

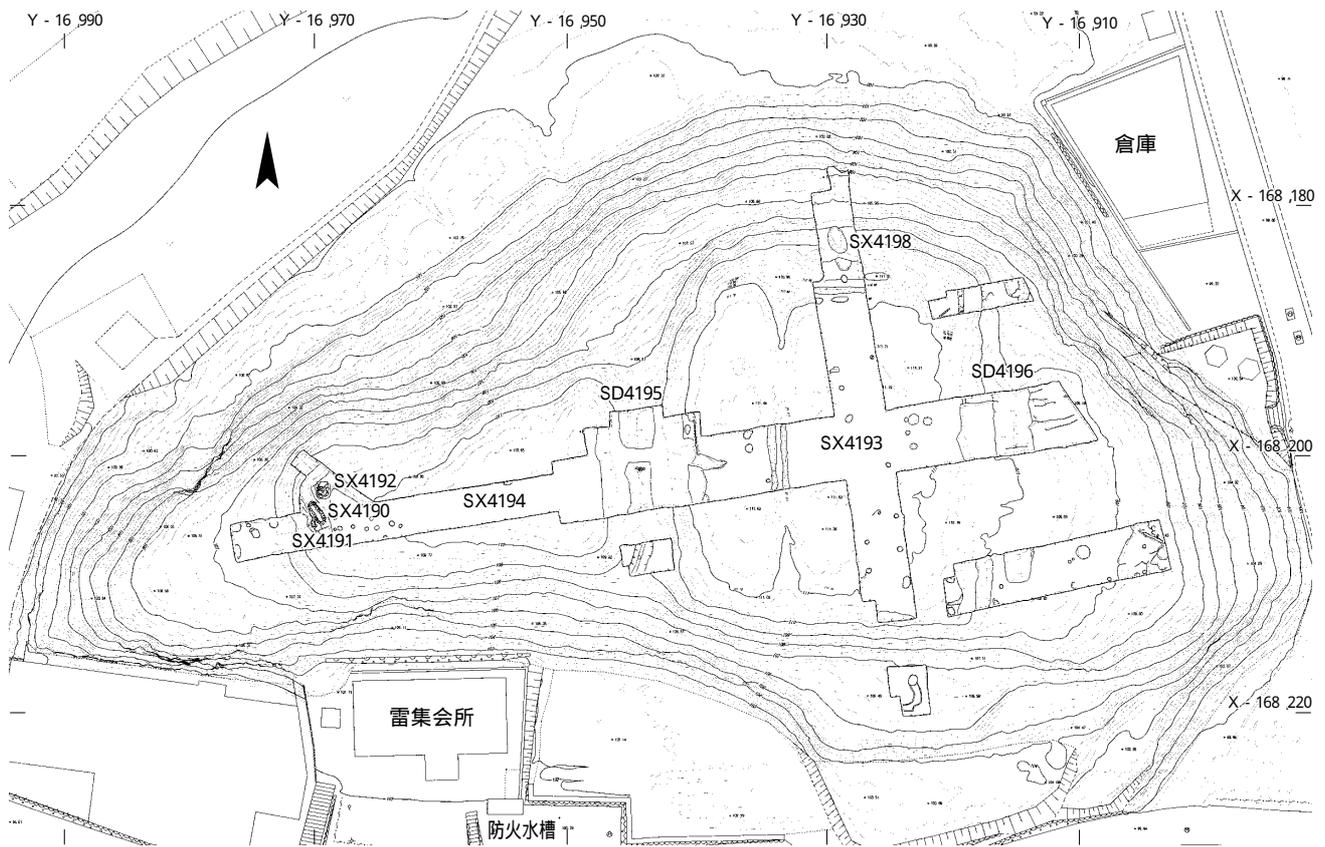


図90 第139次地形測量図と遺構平面図 1:600

SD4196 主廓SX4193の東側をめぐる薬研堀。SD4195とは違い、近世以降に埋め戻された可能性が高い。検出面からの深さは約2mだが、削平されている可能性がある。やはり南側で土橋状の通路をもつ。

SX4198 直径約1mの土坑。北側斜面の途中にあり、山城の防衛施設に関わる可能性がある。(神野 恵)

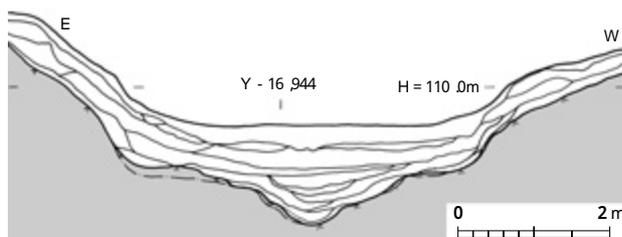


図91 SD4195南壁土層断面図 1:1000



図92 SX4193・SX4194とSX4195(北東から)

4 出土遺物

古墳時代から近代に至る土器・陶磁器類、鉄製品、銅銭、泥面子、砥石などが出土した。

鉄製品 包含層およびSD4195、SD4196から鉄釘が11点出土した。とくに小型石室周辺の包含層から出土した5点は木棺に使われた可能性が高い(図88)。釘頭を折り曲げるものと円形の釘頭をもつものがある。

土器・土製品 古墳時代の遺物では埴輪が最も多く、土師器甕、須恵器甕なども出土している。埴輪はトレンチの西側の斜面にとくに集中して出土したが、原位置をとどめるものはない。飛鳥時代の遺物は、土師器杯A、杯C、杯蓋、高杯、須恵器杯G蓋、杯H、高杯、壺、甕が小型石室の周辺に偏って出土した。中近世の遺物は調査区全体から出土し、かわらけ、陶磁器、土釜などがある。

ここでは本調査出土の円筒埴輪を中心に報告する。なお、その年代観等については、川西宏幸1979「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻2号に従う。

出土した埴輪の総点数は499点である。図93の1は内面にナナメハケ、外面にタテハケを施したのち、口縁端部を外方に折り曲げ、ヨコナデする。端部外面に凹面をもつ。2、4は口縁部端部外面に粘土紐を貼付けて面をなすもの。2は内面にナナメハケ、外面にヨコハケを施したのち、粘土紐を貼付ける。4は口縁端部に粘土紐を貼付けた後、ハケメを施す。外面はタテハケのちヨコハ

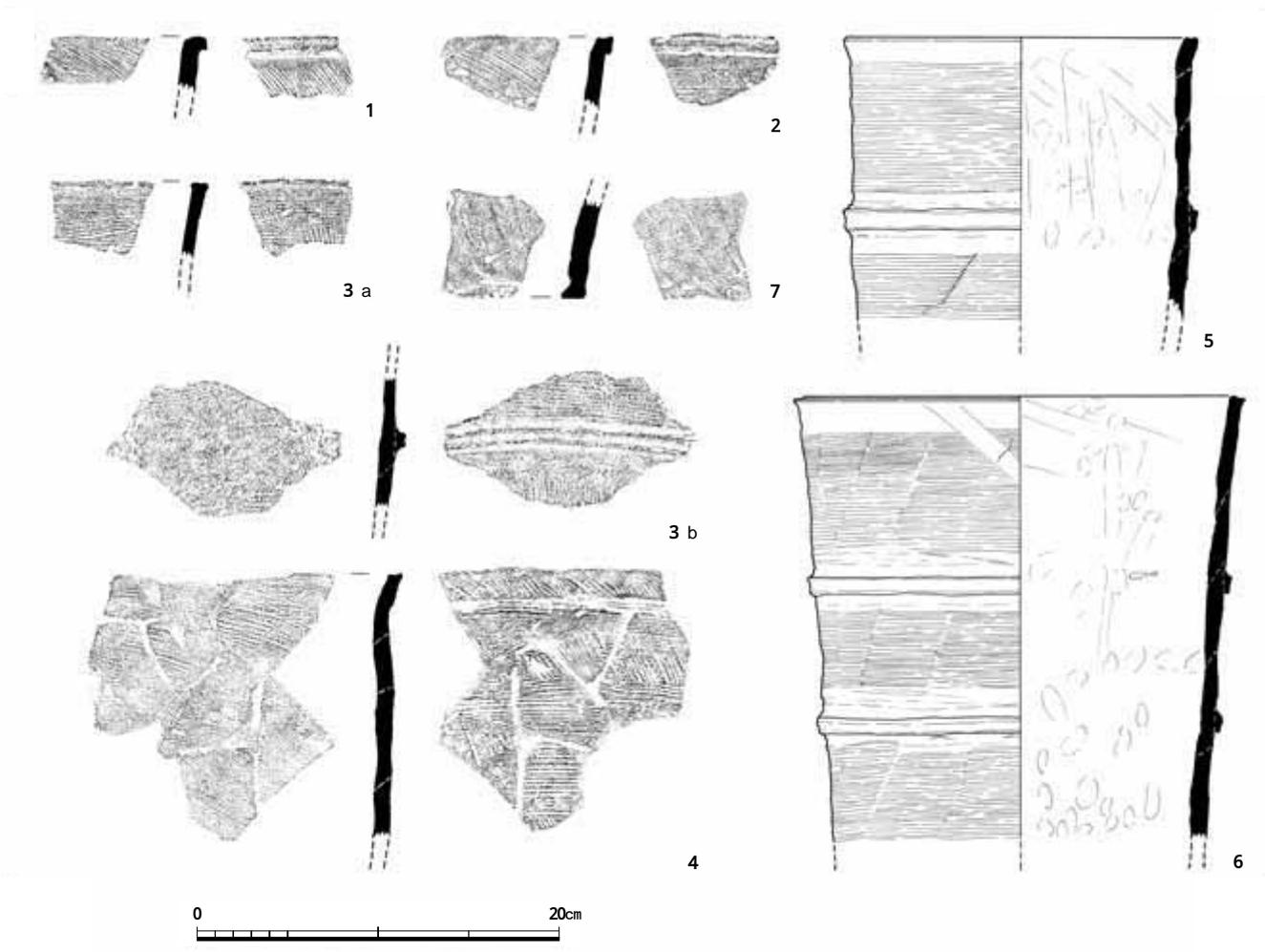


図93 第139次調査出土埴輪 1:4

ケ、内面は口縁端部にのみヨコハケを施す。3は内面にヨコハケを施す。外面は突帯を挟んで下にタテハケ、上にヨコハケを施したあと、ヘラ記号「x」を記す。丁寧に貼付けられた突帯の断面形は四角形で凹面をもつ。5は口縁部から二段目、6は三段目までが遺存する。いずれも口縁端部に凹面をもち、突帯の断面形態はいびつな台形を呈する。体部は粘土紐巻き上げ成形後、内面にナデ、外面にヨコハケを施す。突帯は粗雑なヨコナデによって接合しており、その際、体部内面に添えた指の痕跡が残る。口径は5が19.2cm、6が23.4cm。7は基底部片。内外面に基底部端部に向かってナデを施す。なお、本調査で出土した基底部片は、いずれも同様の調整を施している。

これら埴輪の年代観については、3は黄茶褐色で、突帯も丁寧に形作り貼付けていること、黒斑が認められることから、川西編年のⅢ期（5世紀前半代）に比定できる。その他については、小型で断面形態が台形を呈する突帯をもち、窖窯焼成のため無黒斑である。したがって、川西編年 期（6世紀前半）にその年代を求められる。同様の調整を施す埴輪は、雷丘東方遺跡（奈文研『飛鳥・藤原宮跡発掘調査報告』）や山田道第2次調査でも出土している。（飛田恵美子）

5 まとめ

今回、雷丘本体の発掘調査の成果から、現在の雷丘は中世の山城が築かれた時に、大規模に削られていることがわかった。丘の麓でおこなわれた調査（東麓の75 - 3次南区や南麓の37 - 15次調査など）では、古代の遺構を検出しておらず、比較的浅いところで地山面に達しており、今回の成果ともあわせて、古代の雷丘が現在よりも北、東に大きかった可能性を示唆している。

本調査では、遺構として古墳の痕跡を検出することはできなかったが、雷丘東方遺跡で出土する円筒埴輪と同時期のものが多数出土したことは、5世紀後半から6世紀前半の古墳群が雷丘の上に存在した可能性を示す。

また、削平をまめがれた7世紀代の可能性が高い小型石室を検出したことは、推古朝の小墾田宮の宮地とも関連して興味深い。同時期に作られた緩勾配地の小型石室は、天理市竜王山古墳群（奈良県立橿原考古学研究所編1993『龍王山古墳群』）や葛城市當麻町三ツ塚古墳群（奈良県立橿原考古学研究所編2002『三ツ塚古墳群』）などに類例が求められるが、雷丘のような中枢部に近い場所に墓域が存在することは、古代の飛鳥地域を考えるうえで重要な成果といえよう。（神野）